

## [翻訳教育のススメ] (抄)

翻訳で食べるようになってから 30 年。最初は自分でやり、次に人のものを直し、今は人に教えることが多くなっている。

プロでもなかなか満足 of いく訳文は得られない。ブランド大学を出て、社会経験豊富な翻訳家志願者でも訳文以前の誤りが多い。語学職志望の大学生の英語力はお粗末なかぎりだ。英文を正確に読める人間がほとんどいないのは、中途半端な理解でよしとする旧来の英文読解教育にあるのではないだろうか。

小論では英文読解が必須のさまざまな社会の現場で、英文が正しく読み取られていない典型的な例をあげ、その理由とそれを乗り越えてゆくための方法論を探る。

### I 実社会の現場

- ・ 論理が読めない外信部記者

あの痛ましい 2002.09.11.テロ事件のすぐあと、ブッシュ大統領の演説を伝えた読売新聞の抄訳(2002.09.12 夕刊)の次のくだりが気になった。

「今日、我々は邪悪をみたが、…」

邪悪は見ることができるものなのだろうか？インターネットで原文を参照してみる。

…“today our nation saw evil, the very worst of human nature.”

ブッシュ大統領は、「悪」といってから、それでは漠然としすぎるのでカンマ以下を付け加えた見える。

語法的に読み解けば、この場合 evil は広い意味では「悪」(総称用法で「悪なるもの」)だが、カンマ以下が同格でそれを説明し「人間の本性の最悪の部分」(very は強調、nature は不可算名詞で性質、the worst はその最悪の部分)といている。それで抽象的な evil が「倫理・道徳上のよこしま」と規定されることになる。もっと踏み込めば、ここは抽象名詞の具象化で「よこしまな行為・行動」、saw は「見る」(視覚に映る)が本義だが意味を狭めて「経験する」と解釈できる。すると「最低の人間性が示す卑劣な行為に遭遇した」との日本語が得られるはずだし、またそうしなければ新聞読者に原文と等価の日本語情報を提供したことにならない。

一流新聞社の外信部記者がこの程度の語法を心得ていないとは考えられず、英語での理解を適切な日本語に変換する論理思考力が欠けているのではないか。

- ・ 語感が鈍い経済学者

経済の理論のひとつに「合理的期待形成理論」(この理論で 1995 年、ロバート・エマーソン・

ルーカスはノーベル経済学賞を受賞した)というのがある。素人にはとっつきにくい専門用語だが「こうなったらいいなと思う(期待)ことを無駄なく上手に(合理的)実現(形成)させる」ことなのかな、とおぼろげに思っていた。あるときたまたまその方面に詳しい友人と話していて、原語は **rational expectations** だとわかった。「そうか、こうなるはずだという予測を理屈で組み立てる」ことなのだ、とは英語を見てはじめてわかったのである。これでは訳語の意味があるまい。いや「業界」内でだけわかればよいのだ、素人に対してそのほうが目くらましの効果もある、と経済専門家は考えているのかもしれない。だが、英語から日本語になったとたんに訳語が一人歩きする。いつのまにか「(理論からすれば)期待値がこれぐらいだから、せめてそこまで数字が挙がってほしい…」といった「実現を期待する」コメントが、経済学者自身の口から漏れるようにさえなってしまうのである。

**expect** がもともと「(よいことも悪いことも)見込む」の意味だと認識していれば、このような誤解を招く訳語は生まれなかったはずだ。

- ・ 日本語が弱い外交専門家

## I The aim of the guidelines

The aim of these Guidelines is to create a solid basis for more effective and credible U.S.-Japan cooperation under normal circumstances, in case of an armed attack against Japan, and in situations in areas surrounding Japan.

-----The Guidelines for U.S.-Japan Defense Cooperation

### I 指針の目的

この指針の目的は、平素から並びに日本に対する武力攻撃及び周辺事態に際してより効果的かつ信頼性のある日米協力を行うための、堅固な基礎を構築することである。

上記は 1997.09.24.に公表された「日米の新防衛協力指針」(新ガイドライン)の冒頭部分だが、日本語だけ読んで並列関係が正しく理解できるだろうか。

原文は **under normal circumstances, in case of an armed attack against Japan, in situations in areas surrounding Japan** の三つが 1, 2, and 3 の形での前置詞句の並列になっている。「平時でも、日本が攻撃された場合でも、日本周辺に問題がある場合でも」と素直に理解できる単純な並列だ。だが訳文では、「並びに」と「及び」の並列の格と、それらがつなぐものがわからない。原文通り読み解けたとしても、「平素から」と「周辺事態に際して」のコロケーション(ことば同士の結びつき)が悪く、「より効果的」に自然にはつながらない。

条文であるから、なるべく解釈を入れずに原文に忠実に訳すことが求められるのはわかるが、それにしても並列と言葉の用い方があいまいな悪文である。次のように直してはどうか\*1。「この指針の目的は、平時において、また日本への武力攻撃の場合において、また日本周辺地域での諸事態において、より効果的かつより信頼できる日米協力のための堅固な基盤を構築することである。」

条約なら当然、外交のプロの手が入っているはずだが、この程度の日本語では、条文解釈に齟

齧をきたすのではないか。

\*1 元訳を生かし、直訳調にした。この **credible** は「確かな」の意味だがそのままにしておく。

(略)

## VI 結語

外国、とくにアジア諸国に出かけて英語が話せないと、本当に大学を出たのかと訝られるという話をよく聞く。だから日本の英語教育はだめなのだと、続くわけだが、これは短絡というもの。自国語で高等教育を受けられない国では、英語で授業を受けざるを得ず、必然的に英語がうまくなるという仕組みだ。自国の言葉で高等教育を受けることのできる日本人は幸せそのもの。明治初期にいち早く西洋式の教育を受けた夏目漱石は、植民地でもない日本の高等教育が外国語でなされることに疑問を感じていた。「日本の **Nationality** は誰が見ても大切である。英語の知識位と交換の出来る筈のものではない」と。だが明治 40 年になると、大学の授業は大方日本語で講ぜられるようになっていた。そんなに短期間に、自国語での高等教育が可能になったのは、ただただ日本語の咀嚼力の強さによる。

往古漢文訓読で思考力を養ったように、近代日本では、英文精読が語学力、論理力、表現力を養う源となった。日本の教養人の養成システムに英語学習がしっかり組み込まれていたのである。英語学習は近年になってますます盛んとなり、会話力や概要をつかむ力が伸びていることは確かだし、望ましいことではある。

だが心配なのは、教養主義の没落とともに文章を読む力が明らかに落ちてきていることだ。抽象概念が詰まった外国文を精確に読めてこそ、つまり翻訳できる力がついてこそ、外国語での情報を間違いなく把握でき、外国語での高度の会話もできる。紋切り型の日常会話など下手にやると誤解を増すばかりだ。

翻訳手法を用いての英語教育。興味持たれる方々がおられたら相携えて、さらに有効な手法をともに考えてゆきたい。